

# よい、うまい米作りには 硝酸態窒素(N<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-N)が必要だ

島根県経済連技術顧問

松 浦 章

## 1. はしがき

我が国の農業はどうなるか、稲作はもう必要がなくなったという声をよく聞く。過去の農業は、生活を抜にして経済に専念したのはよくない。また、かつて日本は貧乏であったが、現在は経済大国になった。

そこで当然、農業や稲作りの発想を転換しなくてはならない。稲作りを経済だけで考えると、栄養不均衡の米となり、それは決して楽しい人間生活を営むことには通じない。もちろん楽しい農業にもならない。うまい米に通じ、それを多く生産するために、調和のとれた稲作りということになる

これまで稲作はNH<sub>4</sub>-Nで、麦作はNO<sub>3</sub>-Nで…といわれて、あたかも水稻にはNO<sub>3</sub>-Nを施用してはいけないように考えられていた。しかし、このことは大変な間違いであったことがわかった。一方、NO<sub>3</sub>-Nは土壤に吸収されにくいので、硝酸化抑制する肥料もあらわれている。

## 2. 稲作にアンモニア態窒素(NH<sub>4</sub>-N)と

### 硝酸態窒素(NO<sub>3</sub>-N)の施用法

NH<sub>4</sub>-NとNO<sub>3</sub>-Nとは化学的性質が全く異なり、NH<sub>4</sub>は陽イオンでNO<sub>3</sub>は陰イオンである。たゞNの含有物であるということ、長い間同一の窒素質肥料として来たので、あまり2者を区別して考えようとしなかった。

これらの窒素が、植物蛋白に合成される道も当然異なり、生理作用、作物に及ぼす影響も異なる。

私達の研究によると、稲についてNH<sub>4</sub>は茎葉部に、NO<sub>3</sub>は種実の特効があることが明らかになった。その他詳細を見ると、随分異なった特性がある。

これらの特性を十分に發揮で

きるようにするのが、施肥技術である。

第1表の成績を見るに、草丈はNH<sub>4</sub>の方が大であるが、混合すると、NH<sub>4</sub>だけよりも、NO<sub>3</sub>を混ぜた方が大となる。茎数はNH<sub>4</sub>が大で全重、全粒重、千粒重もNH<sub>4</sub>の方が高い傾向を示す。NO<sub>3</sub>を混合したものの中には、草丈と同様に大なるものがある。

要するに稲体をつくるにはNH<sub>4</sub>が、稔実をよくするにはNO<sub>3</sub>が適することを認めた。更に登熟との関係について行った成績は第2表の通りであった。この成績によると、登熟はNO<sub>3</sub>-Nを施した方がよくなる。稔実歩合も粒千粒重も大で、不稔歩合は減少の傾向を示す。

稔実歩合の最高は、後期NO<sub>3</sub>を増施した区で、続いて穂揃期にNO<sub>3</sub>を施した区で、いずれもNH<sub>4</sub>より勝っていた。このような区は不稔歩合は小で、千粒重は大であった。

要するに、NH<sub>4</sub>-Nは茎葉を作るために、NO<sub>3</sub>-Nは稔実をよくするために特効がある。従って全部をNH<sub>4</sub>-Nにするよりも、NO<sub>3</sub>-Nの入った方がよい。その量は時期によって異なる。

全Nに対して、幼穂形成期頃なれば10%、減数分裂期頃なれば10—20%、穂揃期は20%、傾穂期に10%ぐらいが収量が高い。その最もNO<sub>3</sub>を要する時期は穂揃期であるということができる。

## 3. 稚苗植とNとの関係

最近多くなった稚苗植は、直播と移植の中間的性格を有する。一般に栽培上特に注意されているのは、分けつ数が多過ぎることである。分けつ調節はNの施肥の関係が大である。

第1表 施肥期別のNH<sub>4</sub>とNO<sub>3</sub>の割合の影響

	施肥割合		硝 酸 施肥期	生育並収量調査				
	(NH <sub>4</sub> ) <sub>2</sub> SO <sub>4</sub> (アンモニア)	NaNO <sub>3</sub> (硝酸)		草 丈 (cm)	茎 数	全 重 (g)	全粒重 (g)	粒千粒重 (g)
1.	100	0	—	100.0	24	189	69	28.6
2.	0	100	—	95.1	12	106	48	23.3
3.	80	20	幼穂形	101.0	16	178	68	25.0
4.	80	10	"	97.1	18	193	74	29.1
5.	80	20	減数分	106.5	17	211	81	27.7
6.	90	10	"	104.2	17	189	80	26.5
7.	50	50	傾穂期	111.5	17	199	82	27.8
8.	80	20	"	111.4	18	215	92	30.2
9.	90	10	"	108.7	16	193	73	27.7
10.	50	50	傾穂期	110.1	18	173	60	24.2
11.	80	20	"	111.2	16	205	61	22.3
12.	90	10	"	107.0	16	182	72	24.6

第2表 施肥期別のNH<sub>4</sub>とNO<sub>3</sub>の登熟に及ぼす影響

試 験 区 名	精 粒 重 穎 花 数 (g)	精 粒 重 精 粒 数 (g)	稔 実 歩 合 (%)	不 歩 稔 合 (%)	粒 重 千 粒 重 (g)
1. 標 準	0.0272	0.0287	93.6	6.4	29.6
2. 幼穂形成期までNH <sub>4</sub> -N, 其の後NO <sub>3</sub> -N	0.0281	0.0288	90.9	9.2	29.9
3. 幼穂形成期までNO <sub>3</sub> -N, 其の後NH <sub>4</sub> -N	0.0286	0.0302	92.1	7.9	30.6
4. 後 期 NO <sub>3</sub> -N 3倍量	0.0291	0.0300	96.8	3.2	30.2
5. 後 期 NH <sub>4</sub> -N 3倍量	0.0287	0.0290	94.5	5.5	29.9
6. 穂 揃 期 NO <sub>3</sub> -N 3倍量	0.0291	0.0299	96.5	3.6	30.0
7. 穂 揃 期 NH <sub>4</sub> -N 3倍量	0.0276	0.0284	95.3	4.8	29.8

分けつにはNH<sub>4</sub>-Nが適するが、土壌中ではそのNH<sub>4</sub>をNO<sub>3</sub>にする硝酸化成作用が行われている。

NO<sub>3</sub>は肥効が劣るのみでなく、土壌に吸収保持されず流亡し易いので、なるべくNO<sub>3</sub>にならないことが望ましいとされていた。その要望に答えるために硝酸化成抑制力のある肥料が登場した。

ところがNO<sub>3</sub>は欠点のみでなく、稔実をよくする…という長所がある。簡単に割り切らないで、程ほどにすることを狙いとすべきである。

そのためには、土地を見て硝酸化成の起り易いところ、特に有機物の少ない砂地の乾田はNO<sub>3</sub>-Nになり易いので、なるべくNH<sub>4</sub>-Nを長く地中に存在させるために、抑制力のある肥料を多く元肥に施用する。これと反対に、NO<sub>3</sub>-Nの出ないようなところでは、抑制しない方がよい。次に私が行った土壌の種類と、酸化還元電位の成績を示す。

第3表 土壌の種類と酸化還元電位 (表層土)

	滞水10日後		滞水30日後	
	Eh <sub>h</sub> (ウルト)	PH	Eh <sub>h</sub> (ウルト)	PH
花崗岩	0.531	5.3	0.459	5.9
沖 積	0.317	5.9	0.207	6.5
班 岩	0.366	5.9	0.434	6.6
三紀層	0.441	5.2	0.350	5.6
洪積層	0.421	5.5	0.351	5.5

この成績によると、Ehの高い花崗岩は硝酸化成を抑制する必要があるが、沖積層土にはその必要のないことを知る。

島根県の展示圃で、抑制力のある肥料を施用して見たが、ところにより効果の出方が著しく異なる。これは施用する時期と量のみでなく、硝酸化成力の大小を考えた処置が大事である。

稚苗植は特に分けつが多く、日照不足となり米質が低下し易い。そこで茎数の増加と施肥の関係は特に重要である。稚苗植に追肥の効果は大きいですが、失敗も多いので、特に施肥に注意したい。

#### 4. 硝酸化成抑制剤と

##### 稚苗植の展示圃より

最近緩効性肥料とともに、硝酸化成抑制剤入りの複合肥料が多くなった。これはNH<sub>4</sub>-NよりもNO<sub>3</sub>-Nが不利との考えからである。

ところがイネにもNO<sub>3</sub>-Nが

必要であることが明らかになった。硝酸化成抑制力のある肥料を施用する時は、上手に施用せねばならない。

島根県において、稚苗栽培について試験展示圃で行った成績を見ると、11カ所の成績で、抑制剤入りの肥料施用区の玄米収量の割合は、標準区100に対し最高は112、最低94、平均は101.7であった。一般に砂土に効果が大き、粘土には小とされている。

この展示圃では最も効果の大であったのは、第三紀層の鉄含量の多い赤色埴土であり、沖積層埴土で有機物の多い田は効果が最小であった。

洪積層の山間部で排水のよい柵田は効果が大きく、沖積層で排水の悪い湿田では効果が小であった。このように砂土地に効果が大きく、埴土地に効果が小さいとかいった考え方は原則であるが、それのみでは相異なる場合が多い。

私は酸化還元を中心にして、抑制剤の効果はEh 0.5V以上の酸化状態のところでは大でEhが小で0.4V以下の還元状態のところでは効果が少ないと思われる。

このように硝酸化抑制には数種あるので、その特性を調べて、Ehの高い酸化状態の田圃の稚苗植に施用するようにお勧めする。

#### 5. む す び

よいまい米をつくるためには、よく稔実した粒張りのよい米をつくることである。従って検査等級の高い米ということになる。

食味は各人により異なるので、それに応ずるには収穫時期を調節することである。

収穫するまでは、十分に稔実し、粘弾性の高い米を生産するように肥培管理をすべきである。

粒張りをよくするためには、イネの生育の後期、すなわち幼穂形成開始期後のNO<sub>3</sub>-Nが必要である。その供給を調節するために、硝酸化成抑制力のある肥料の施用を渴望して擲筆する。